

Stephen Holmes

Kendall助教授(メアリーマウント大学)の短期招請について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学国際交流センター 公開日: 2010-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 内田, 祥哉 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/8059">http://hdl.handle.net/10291/8059</a>

## VII Stephen Holmes Kendall助教授（メアリーマウント大学）の短期招請について

明治大学工学部元教授 内田 祥 哉

今日、日本の住宅は、数の上では、一部都心の不足を除いて、ほぼ充足し、今後は面積の増加とともに、多様化の傾向が一層顕著になるといわれている。

他方、都市住宅も徐々に建設年代の古いものが増加し、住宅の平均年齢が高齢化しつつある。このような状況の下で、日本の経済状況が、過去の右肩上がりから安定期に入ったことは、住宅についても、今までのようにスクラップアンドビルドの時代を脱して、修理改造で長寿化を考える時代に入ることを自覚しなければならなくなった。

筆者等は、早くから、住宅生産のオープン化に興味を持ち、それに関する研究を続けてきたが、（内田祥哉著：建築生産のオープンシステム：1977：彰国社）住宅生産の視点が、多様化と、修理改造に重点を向けられるようになって、部品のオープン化の必要性が専門家達に注目されるようになった。

オランダでは、ハブラーケン（Habraken）教授が、彼の著作の中で、住宅の多様化を、都市計画的レベルから説きおこし、居住者の趣向に従った発注ができるシステムが必要であると述べていた。米国では、彼の意見に注目したM. I. T. が、彼を教授に迎えて、研究を発展させ、多くの優秀な、研究者を、世界各国に送り出した。

我々は、互いに目標の共通性を認識して、親しい交流を続けてきたが、ハブラーケン教授の直接の薫陶を受け、この問題に、最も熱心で、若いエネルギーを燃やしている、スティーブン ケンドール（Stephen Kendall）助教授に着目し、彼を日本に招聘し、国際的視野から見たこの問題を、学生に披露してもらい、併せて、国内の有識者とも交流を深めてもらうことを考えていた。

ケンドール助教授は、1995年5月27日より1ヶ月、明治大学理工学部建築学科に滞在し、学内外の教育研究活動に参加した。

学内で行われた最初の講義は、彼の生活経験の中から、彼の研究テーマを絞ってきた経過を語り、現在の研究テーマと、その重要性を認識させるものであった。即ち、講義内容の要約：教授のこれまでの経歴と、実際に設計、施工された作品を、スライドを使って説明した。また、アメリカの住宅の代表的構法である2×4で造られる構造壁の内側に、柱と梁で構成された内部造作を用いることによって、間取りの変化を実現する、独特の提案も示した。（5月31日12時40分より、於4310教室 出席者25名）。

第二回目の講義は、既に基礎的知識のある学生を対象に、この研究分野の先端の一部を紹介し、国際的視野から開発研究の必要性を説明した。即ち、

議事内容の要約：アメリカの住宅生産の歴史的背景を紹介し、建物の主要な部分の生産が、整然と生産されるようになったにもかかわらず、配管配線の部分が、もつれたスパゲッティのようであることを説明した。（6月2日10時30分於0201教室 出席者70名）

第3回目の講義は、彼が工夫を凝らしたワークショップ風のもので、本学の学生だけでなく、社会人の参加も得たこともあり、限られた人数ではあったが、平常の授業にはない新鮮さがあり、大学教育のあり方に対する深い示唆もあった。即ち、

講義内容の要約：住宅内の様々な設備機器に付属して入って来る配管配線の問題を歴史的背景に従って説明した上で、幕張に建設中の現実のアパートを教材にして、参加者に、配管配線計画を考えさせるワークショップ形式の授業となった。参加者は、建物内を這い回る配管配線の秩序化を考えながら、住宅の多様な間取りの実現と必ずしも逆行しないことを理解することになった。（6月24日13時 於0311教室 出席者20名）

以上の直接的教育活動とは別に、6月9日には、たまたま年に一度開かれる建築学科の教職員懇親会があったため、ケンドール助教授もこれに参加し、現役の職員はもとより、退職した先輩の教職員との交流も出来、建築学科全員との親交を深めることが出来た。

学外での講演活動も活発で、日本建築学会、千葉大学、東京都立大学、関西では、竹中工務店に招かれ、講演を行った。特に、日本建築学会の講演会では、他大学、建設会社、住宅生産者等の専門家が集まり、高度な研究内容での交流が、深められた。

この滞在期間中、教授は、自身の調査活動も極めて密度高く進め、建設省建築研究所、を始め、大手建設会社の研究所、日本住宅公団、長谷工、大和ハウス、積水ハイム、ナショナル住宅等、主要な住宅関係の研究者の殆どを訪ねている。

更に、住宅関係では、関東関西を問わず近代的設備を備えた工場の殆どを調査した。また、建設現場についても、目下進行中の注目すべきものを選択して現地を訪ねており、第三回目の講義の中で、ワークショップの教材となった建設中の集合住宅は、その一つである。

以上、ケンドール助教授の精力的調査活動と、多数の研究者との意見交換の結果は、後日、彼の研究の成果として英文で発表されたが、彼の今後の活動によって、此の分野に、国際的な研究活動の枠組みが整えられることが期待されている。

今回、彼が明治大学に招待されたのを機会に、日本到着前に台湾を視察し、又離日後帰国前に中国本土を視察したが、このことは、欧米を中心にした国際活動にアジアの視野をえたと言える。以上、彼の日本での経験は、国際的な研究活動のわくぐみをととのえるのに、極めて重要な役割を果たすことになった。

ヨーロッパ ハーグに本部を置く C.I.B (conseil International du Batiment pour la Research Studies and Documentation: (研究と調査の為の建造物国際会議) は今度、住宅のオープンシステムのために、新しいワーキンググループを造ることになった。その最初の会合を、オランダか、日本のいずれかで開くことになっ

たが、その纏め役に、双方のアメリカ人であるケンドール助教授が欠くことのできない人材として、注目されることになった。

此の会議の準備は、最近の発達した情報システムに乗って日米欧の間を、短期間に目まぐるしく駆けめぐり、今秋11月東京で開かれることが、決まった。この間の経過を通じて、ケンドール助教授が、キーパーソンとして活躍したことは言うまでもない。

国際交流の任務を見事に果してくださったスティープン ケンドール助教授に、改めて感謝し、今後は、日米欧の架け橋のできる貴重な人材として、国際的な視野での活動をされることに、大きな期待をしたい。

最後に、此の意義有る国際交流の援助を頂いた、明治大学国際交流センターの配慮有る決定に、深い敬意を表し、厚意有るお世話を頂いた同センターの職員の皆様に心から感謝とお礼を申し上げます。